

1
訪問介護活動
(HBC)

■救急法レベル1研修(チルンザナニ) 2014年10月

救急法研修をチルンザナニのHBCボランティア22名を対象に実施。3日間の研修を経て、怪我の応急方法、呼吸蘇生法を学んだほか、てんかん、火傷、へびに噛まれた際など村内でよくある病気・怪我への対応方法を学んだ。



【上】呼吸蘇生法は救急法の基礎。心臓マッサージ、人工呼吸のテクニックを実践を交えて学ぶ。レベル1を修了するには呼吸蘇生法をマスターしなくてはならず、最終日のテスト前夜はボランティアたちが家で家族と練習した。【右上】包帯を使った応急処置の方法を学ぶ。【右下】脈の測り方を学ぶ。大半のボランティアがやり方は知っていると言ったが、実際にやってみると正しい方法を知っていた人がごくわずかだった。

1
訪問介護活動
(HBC)

参加者
の声

「それが村の長老であろうと、教会であろうと結核やエイズの蔓延を止めるために、協力してもらわなくちゃいけない」

～ジュリア・ムダウ さん
(チルンザナニ HBCボランティア)

ワークショップを通じて改めてさまざまなコミュニティの課題が結びついていることに気付いた、ジュリアさん。

計画段階では、教会や村の伝統的な首長などHIVや結核の予防に影響を与えられる人を対象とした啓発活動をしたいという意見が出た。それらが難しいターゲットであるからこそ、意識を変えていくのが大切だと、積極的にアプローチしていきたいと議論がされた。



(特活)日本国際ボランティアセンター

2
HIV/エイズの影響
を受ける
子どもたちの支援

■子ども虐待見分け方・対策に関する研修 2014年8月

どんな行為が虐待と言われるのか、虐待が疑われる子どもをどう見分けるのか、ボランティア達の日々の疑問を解決するために本研修を実施した。トレーナーは子ども虐待のホットラインを運営するチャイルドラインが担当。実際に起きたケースなどを基に子ども虐待への対応法を学んだ。



【上】実際にDICセンターで起こった子どもの虐待のケースを挙げ、どのように対応したらいいのかを聞くボランティア。【左上】研修の参加者たち【左下】参加者たちのかばんを集め「このかばんの中身をこれからみんなで見てみよう」とトレーナーが言うと、怪訝そうな顔をするボランティアたち。「かばんの中身を明かされたくないように、子どもたちが勇気を持って話した内容を人にむやみに教えてはいけない」と。虐待を報告してきた子どもたちへの守秘義務について話し合う場面。

2
HIV/エイズの影響
を受ける
子どもたちの支援

■コミュニケーション・カウンセリング研修 2014年10月

一年次に実施した研修をさらに深め、コミュニケーションに焦点を当てた研修を実施。トラブルを抱える子どもたちが心を開いて話すことのできる環境をどうつくるのか、保護者とはどのように対話をするべきかを学んだ。



【右上】他人とのコミュニケーションはまず自分を知ることからはじまる。自分の「表の顔」を前に「裏の顔」を背中に描いてみる。【上】コミュニケーションの基本は人の話を聞くこと。これが意外と難しい。目を見て話す練習中。【右下】この研修の終了テストは1対1のロールプレイ方式で行われた。ロールプレイで採用されたストーリーはすべてDICで起こった実話。問題を抱えた子どもにボランティアが問いかける中で、5日間の研修で学んだコミュニケーション方法が使えているかを評価した。

2
HIV/エイズの影響
を受ける
子どもたちの支援

■子どもの交流イベント 2013年11月、2014年9、10月

学年末恒例の子ども交流イベントを実施。9月には日本からアートプロジェクトが訪問し、子どもたちと共に人形づくりに挑戦した。10月にはンジャカンジャカのDICを他2センターの子どもたちが訪れ、準備してきた劇などを披露した。



【上】10月に実施した交流イベントでは、センターの子どもたちがHIVをテーマにした劇を披露した。【左上】9月のアートプロジェクトの訪問より。初めて針を使ったという男の子も起用に布を縫いつけていきます。【左下】普段アート活動に触れる機会の少ない村の子どもたちだが、抜群のクリエイティビティを発揮しユーモアに富んだ人形ができあがった。後日、子どもが作った人形を見た保護者からは自分の子どもがこんなものが作れるとは思わなかった、驚きと喜びの声が聞かれた。

2
HIV/エイズの影響
を受ける
子どもたちの支援

参加者
の声

「私たちでは救えなかった子どもたちが目の前にいる。
もっと、DICの活動を活発にしていきたい」

～ ルイサ・コモロさん
(子どもケア・ボランティア ヒヤンガナニ・タウンシップ)



母親が亡くなった直後DICに通ってこなくなってしまった14歳の女の子。後日数週間に渡って行方不明になっていたが、その後DICの説得で学校に復帰した。行方が分からなくなる前に救ってあげたかったが・・・と悔やむ。

少しでも迅速に子どもたちの変化に気づき、対応できるように今後もスキルアップしていきたいと意気込む。

(特活)日本国際ボランティアセンター

3

HIV予防啓発

■子どもケアボランティアによる啓発活動 2014年7、8月

DICボランティアが自らイニシアチブを取り、HIV予防啓発活動を開始した。近隣の診療所や、若者を対象としたHIV予防啓発を行なう他団体なども招くなど周辺ステークホルダーとも協力している。



【上】ボドウェ村の学校にDICボランティアが招待され、HIVについての授業を実施。【右上】ンジャカンジャカ村での啓発活動で発言するボランティア。【右下】ハンガナニタウンシップで行われた啓発活動に集まった人々。この日30名以上がHIVテストを受けた。

3
HIV予防啓発

参加者
の声

「学校で話しをしてほしいと招待されたときは緊張したけど、話しに聞き入る子どもたちを見てとても自信がつかれました」

～ グラディス・ムシゴさん
(子どもケア・ボランティア ボドウェ村)

DICに通う子どもたちがHIV／エイズについて調べるという宿題をもってグラディスさんに相談にいき、その宿題の出来栄をみた先生に声をかけられたことがきっかけとなり、HIVについて授業をもつことになった。

その後もボドウェ村の他のボランティアと共に、学校で子どもの権利などについて教えている。



(特活)日本国際ボランティアセンター

4 HIV陽性者 支援

■HIV陽性者サポートグループとの交流

チルンザナニが協同する診療所を拠点するHIV陽性者のサポートグループとコンタクトを取りはじめ、2014年9月には家庭菜園研修を実施。10月には会合に同席させてもらうなど、今後の活動の足掛かりを作った。



家庭菜園研修に参加したサポートグループメンバーの家庭を訪問。参加者11名全員がなんらか野菜の栽培をはじめていることが確認できた。



サポートグループ会合に参加。この診療所では200名以上のHIV陽性者がARVを受け取っている。それらの陽性者を4つのグループに分け、毎週火曜日に薬を受け取る際に、サポートグループ会合を実施している。

4
HIV陽性者
支援

参加者
の声

「男性がもっとHIVについて関心を持つよう、男性だけを
対象にした啓発キャンペーンをやっていきたいんだ。」

～ フィリップ・マルレケさん
(サポートグループ・リーダー、写真右)



ボランティアとして、サポートグループのリーダーを務めるマルレケさん。JVCがフィエボム村で実施した菜園研修のことを聞きつけ、サポートグループ対象にやってほしいと、自ら提案してきた行動派。

今後サポートグループと共に啓発活動を実施していく予定。

(特活)日本国際ボランティアセンター

5

家庭菜園活動

■ファシリテーターによる家庭菜園研修 2014年7月～

第一期から育成してきたLMCC活動地の菜園ファシリテーター6名により、36名の地域住民が家庭菜園研修を受けた。人に伝える、教える難しさを知る一方、研修に参加した人びとの役に立つ喜びを体験することができた。



【上】フローレンス・マシャウさんの初めての研修。事前に準備されたノートを片手に握りしめていたが、はじまるとそれを見ずにすらすらと説明していく。自分の実体験を含め、菜園の技術だけでなく、いかに家族の健康を救ってくれているかを語っていた。【右上】リジー・マエザさんの研修。各ファシリテーターの研修は、居間、庭先、ガレージの中など、家の中のあるスペースを使って行われた。【右下】リネス・マンデワネさんの研修。2～3日で行われる研修では、座学のあと、参加者の家庭で実際に菜園を作り、実践をとおして参加者の質問に答えていく。

5

家庭菜園活動

■家庭菜園研修(チルンザナニ) 2014年7月～

新たに今期活動を開始したフィエボム村で、3回に渡りチルンザナニHBCのボランティア22名を含む約60名の地域住民を対象に家庭菜園研修を実施した。



【上】チルンザナニのスタッフの家を使い、青空の下研修を実施。【右上】地域の幼稚園で実施された研修の様子。チルンザナニと協力している幼稚園や、高齢者グループなどさまざまな団体からも参加があった。【右下】研修を実施した家庭のリソースマッピングを行う参加者。建物などに加え、果樹などの自然資源などを把握し、菜園に何が活用できるかを考えた。

5

家庭菜園活動

■ 菜園活動の個別指導(モニタリング) ～通年

菜園研修の参加者の家庭菜園を1年を通してモニタリング。定期的な指導をとおして、モチベーションを上げ、季節ごとの植え替えの時期などにアドバイスをを行った。



【上】ルイサ・コモロさんの研修参加者の菜園を訪問。マルチなど研修で教えてことがまだ実践されていなく、アドバイスをした。【右上】ンジャカンジャカD ICにて。定期的な収穫をすることで新しい葉をつけることができると指導。【右下】ファシリテーターそれぞれの菜園をみんなで共に訪問。事前に設けていた菜園スタンダードを使って、お互いの菜園を評価した。



3
家庭菜園の普及

参加者
の声

「菜園をはじめてから、一度も野菜を買いにお店に行っていない。」

～ジュリア・レリサさん
(ヒャンガナニ・タウンシップ)



研修後にはじめて庭先に作物を植えはじめた、ジュリアさん。今では、いつ訪問しても菜園はあおあとし、野菜が育っています。自分で作った野菜を食べ始めてから健康になり、病気もしなくなったと言います。また、お店に野菜を買いに行くこともなくなり、家計も助かっています。